

新約△アリス  
お試し版

これは何の変哲もなく面白味もない何処  
にでも存在する世に有り触れた話の一つ

※本作品はフィクションです。実在する人物・団体・事件等には一切関係ありません。

※これは「お試し版」です。本編の序章と第一話のみ掲載しておりますので、本編の仕様とは一部異なります。

※誤字脱字には十分気をつけてはありますが、全く無いとは云い切れません。また、話の内容・設定・矛盾・その他の細かい部分、及び、本書の文体が気に入らない等々の事柄を含め、本書がご不要になりました際には、削除してください。



# 序

石畳が何処までも続く広場。

この場の主のように鎮座する断頭台。

断頭台の周りに転がるは、夥しい量の字、字、字、字、字。

世界中に存在するであろう、ありとあらゆる字だ。

だが、どの字も例外なく断頭台に切断されたかのように、真つ二つになって石畳の上に転がっている。

その字に埋もれるようにして、字以外のものが一つ、転がっていた。

それは、ニンゲンの首。

胴体がくっついていた時には腰まで伸ばされていたのだらうと解る黒髪のでっぺんに、ペロア地で出来た黒く大きなリボン結び、愛らしいと表現するに相応しく人好きのする容姿をしている者の、首。

その首に浮かぶ表情に苦悶の色はなく、安らかに眠っているかのようなうだ。

そこへ、ヒトのカタチをした白い闇の塊が一つ現れた。

暫くの間、広場を眺めるような仕草をした後、白闇はゆっくりと動き出す。

白闇は、何かを探しているらしい。

切断された字を一つ一つ確かめ、探し求めているものではないと解ると、乱暴にそれを放る。

その作業は、飽くことなく繰り返され。

白い太陽が沈み、黒い月が昇り、黒い月が沈み、白い太陽が昇ることを幾度繰り返しても終わらず、永遠に続くのではないかと思われた。

やがて。

白闇の手が、ふと止まった。

白闇の視線の先にあるのは、切断された字ではなく、首。

あの安らかに眠る愛らしい首だ。

白闇は震える手で、転がる首を拾い上げると愛おしそうに抱きしめる。

どれだけそうしていたかは解らない。

白闇は首に何言かを告げると、首を抱きかかえたまま、ゆっくりと歩き出す。

足を引きずっているかのような、白闇の歩み。

ずりずりと、ずりずりと。  
ずりずりと、ずりずりと。

白闇が歩いた箇所には罅のようなものが生じ、その罅を中心に、広場に鎮座する断頭台が、周囲の風景が、全てを覆い尽くす空が、何もかもが、音もなく崩れ始める。

その音を耳にした白闇が、振り向きもせずにはいた。





## 第一話

——現実を仮想現実にかえる虚構MMORPG“黄金色の午後の庭・オンライン”。

このゲームは、任意のデバイスにソフト、乃至、アプリをインストールし、起動するだけで、現実を一時的にはあるが、仮想現実として書き換えてしまう独自のシステムを採用している。

見慣れた何時もの風景が指先一つで、非現実へと、現実ではあり得ないファンタジー世界へと、一瞬で変わるのだ。

非現実。

そこでは、現実にいる者の姿形も、非現実に合わせた者の姿形へと変わる。

強者は弱者に。

弱者は強者に。

現実が夢に。

夢は現実に。

法と秩序で守られた世界は、無法と無秩序に溢れた世界に。

無法と無秩序で溢れた世界は、法と秩序で守られぬ世界に。

そこに現世の理はなく。

全てが理不尽と不条理と矛盾と、不条理と理不尽と矛盾で出来ている。

それは、全てが嘘偽りのフェイクだからこそ、出来ることであり。

それこそが、このゲーム最大のウリである。

しかし、だからと云って、他のMMORPGと全く違うわけでもない。

何せ、運営会社は集客の為か、それとも既に居る顧客の為か、今日も今日とて、何かしらのイベントを実施している。

それは、ログインするだけで仮想現実用のアイテムが貰えると云ったものであったり。強敵討伐イベントであったり、アイテム収集系のイベントであったりと、様々だ。

だが、イベント自体に強制参加等々の義務はなく、各々好きなことを、好きなようにして過ごしているのは、どのMMORPGでも見られる風景だろう。

だが、ウリのシステムがシステムなだけに、中毒者が続出。仮想現実から現実

に帰って来ない者が日に日に増え続け、社会問題になりつつある。

だが、そんなことは何処吹く風。

現実では地方都市の駅前広場と、その周辺に乱立するビル群として存在し。

仮想現実では、各地へのワープ地点として活用されているポータル広場前の、ビルの森として存在する場。

此処は、何時如何なる時でも、人が絶えない場所、仲間との待ち合わせや、冒険者向けの商売に情報収集、クエストへ出発する為の臨時人員集め等々の看板が処狭しと乱立している。

そんな風景を、とあるビルの屋上から見下ろしているのは、二つの影。

一つは、腰まで伸ばされた黒髪のでっぺんにベロア地で出来た黒く大きなリボンを結び、ロング丈の黒地のワンピースにシンブルな白地のエプロン——所謂、黒いエプロンドレスを身に纏い、愛らしいと表現するに相応しく人好きのする容姿をした、金色の双眸を持つ少女、にしか見えない者。

もう一つは、闇で作ったのかと思われる黒よりも黒が濃いローブを身に纏った

長身の者である。が、フードを目深く被っている為に、容姿については解らない。寄り添うようにして立つ二人の身長差は、お互いの頭二つ分と云ったところか。

「見ろよ、チャシャ」

と、眼下を指さす少女擬きの口から漏れたのは、ハスキーボイスと云われる声音。

「はい」

と、チャシャと呼ばれた者が応える抑揚の無い声は、青年のソレであつた。

「文明の利器ってのは、便利だなア。現実から目を背けた、何も知らないシロウサギ候補が、こんなにも集まりやがってくれてるんだからよ」

くつくつと喉を鳴らして笑う少女擬きの口元は、美しく歪んでいる。

「アリス」

抑揚のない声が、少女擬き——アリスの名を、窘めるよう口にした。

「あんだよ？」

チロリと、アリスは青年——チャシャを見やった。

チャシャは、アリスを見返すこともなければ、何も口にしない。

だが、アリスにはチャシャが口にしようとしていることが、解るらしく、

「相変わらず、お前は『シロウサギ』が嫌いなんだな」

と、大きな溜息を吐くと、

「でもな、今回ばっかは諦めろよ、チャシャ。何せ、ニンゲンどもが俺達のセカイに土足で入り込んだ挙げ句、好き勝手に弄くつてくれてる所為で、今じゃあちこち、何処のセカイも、セカイそのものが滅茶苦茶になっちまってる。こころで一回、セカイを元に戻さには、俺らのセカイはどんどん歪んで狂い続けて原型を無くして、そのうち俺らが俺らですら居れなくなっちまう。で、そうならねえよーにするのにや、俺達の世界に適合するニンゲンであるシロウサギが必要不可欠になる。そのシロウサギを探す為に、殿が頑張ってニンゲンのセカイに、わざわざこっちから浸食してやるシステムを創り上げてくれたんだから、その苦勞を無にするわけにやあ、イカンのだよ」

「承知しております」

「お前の場合、承知してるだけ、だろ」

アリスは苦笑いに良く似た表情を浮かべると、チャシャから視線を外し、  
「取り敢えず、だ」

そのまま視線を駅前広場の人集りに向け直す。

「ウチんとこのシロウサギは一匹で良いからな。残りは、この間の札にスノウだ、赤の字だ、灰だ、ヘングレ兄弟だののところに、熨し着けて押しつけてやるとして、

つと」

それにしたって多いなと、

「チャシャ」

間引け、と云う言葉を出さず、アリスがチャシャに目配せをすると、  
「よろしいのですか？」

やはり抑揚のない声のまま、首を傾げる仕草をするわけでもなく、チャシャは問う。

アリスは勿論と頷こうとしたのだろうが、はたと、

「最低でも、一匹は残せよ」

この間みに全滅はさせるなと、釘を刺したところ、

「御意」

とだけ云って、チャシャはビルの屋上から、音もなく飛び降りた。

程なくして、ポータル広場から、悲鳴と血飛沫が上がり始める。

アリスは、その様子をビルの屋上からニヤニヤと眺めているだけだった。

×

×

×

広場に居た者にとって、それは突然の出来事だった。

空から何かが降って来たことに誰も気付かず、気付いた時には誰かが悲鳴を上げて居た。

その理由は、運営側が用意していた時限湧きのモンスターが発生したからかと、思った者も居たが、モンスターは基本、道路にしか現れないことになっている。

それに、そうしたトクベツなイベントがある際には、予め告知がされることとなっている。

では、誰かが、モンスター召喚の実——通称、テロの実を使って、何かモンスターを呼び出したのか。

後者であれば、一日に数回はあることだ。

仲間内で遊んで居たら、ついつい、ボスクラスと呼ばれる巨大で高レベルのモンスターが召喚されてしまい、それを見た周囲の者が、得られるアイテムと経験値目当てに、共にモンスターと戦う。

と、云ったことであれば、悲鳴ではなく、多少の罵詈雑言から、歓喜の声によく似た何かに変わるはずなのだ。



だが、今日は違っていた。

誰も彼もが純粹な悲鳴を上げて、四方八方に逃げていくのだ。

空から降ってきた『何か』の着地点近くに居た者や、物珍しさから『何か』の正体を確かめようと武器を握り、その『何か』に挑んだ者達は、悉く四肢を切断され、肉片と血を周囲に撒き散らしながら、最終的に地へ転がる。

このゲームでは、モンスターに殺された場合、何処かの墓場からのリスポーンとなるが、条件——例えば、装備品の効果や、甦生系の呪文やアイテムにより、その場でのリスポーンも可能だ。が、そう云った物を持っていない、呪文等々による手助けがない場合は、光るエフェクトと共に身体が一旦消え、近場の墓場に移され、そこからのリスポーンとなる。

だから、と云うわけではないが、敵に斬られたり、殴られたりしても、残酷な描写はなく。あつたとしてもSEだけで済まされ、終わるはずなのだ。

それなのに、と。

誰かが、叫んだ。

頭のおかしいPK野郎が出た、と。

PKが可能なゲームにおいて、それをする者の殆どは、周囲に敵意を持っており、己のナニカを満たす為にやっていると思われるのだが、それはやってい

る本人にしか解らぬことである。

と、云うことはさておいて。

P Kが可能な場所は、現実ではスポーツと公園と云われる場所や、それが出来るところとだけだと、こう云われているわけだが、実際にはそれが暗黙のルールとなつていただけであり、街中で出来ないわけではないのだ。

だから、極稀に、快楽目的で街中でのP Kが行われることもある。

が、その際は、有志が立ち上がり、それを返り討ちにするのである。

が、今回は一筋縄ではいかないようで、やがてこんな叫び声が聞こえてきた。  
このP Kはチーターで、凶悪なウィルスバラまいている、と。

そのウィルスに感染したら、実際にはあり得ないはずのキャラロストをし、二度と現状復帰が出来なくなるだ、と。

こう云った声を鵜呑みにし、皆逃げ惑っているのだろう。

だが、そうして逃げ惑うのも仕方の無いこと。

何せ、現実には『タイセツなもの』が何もないと、そこに愛着を持たず斜に構えている者程、非現実には『タイセツなもの』が幾つもあり、そこに愛着を持ち素直に生きているものなのだ。

此処は現実でないから、全てを失い零の状態から簡単にやり直せるとしても、

それが辛いと云う者は多く、実際にソレを経験した者の多くは目の前の非現実から離れ、別の非現実へと移って行ってしまうので、運営はそうしたことになるようにと、細心の注意を払っている、はず、なのだ。それなのに。

やがて、悲痛な叫び声は、一つ残らず消えた。

地に転がる四肢の山は、草に変わり、木に変わり、血溜まりは無色透明の液体となり、土に吸収され、ビルの森には何処から生えてきたのか蔦に覆われ。

ポータル広場だったこの場は、あっと云う間に緑に覆われた場に――、例えらなら、現世に生きているニンゲンが滅び、文明が崩壊した後、地上にある物はこくなるであろうと云われているような、そんな風景に変わる。

「ふむ」

ポータル広場のシンボルである噴水の上に立ち、そこからぐりと周囲を見回したのは、チャシャである。

実はこのチャシャ、ビルの屋上から飛び降りた後、この噴水の上に着地するなり、アリスに云われたことを早々に実行していたわけだが、一体どんな術を使つて、このような惨事を引き起こしたのか。

「やり過ぎましたかね」

ぽつりとこう呟いたのは、アリスに『一匹は残せ』と云われたのに、見た限り一匹も生存者が残っていないさそうだからだろう。

ただ、呟かれた声には、相も変わらず抑揚がない為に一切の感情が読み取れない。

「これでは、アリスが」

と、チャシャはふとした様子で、噴水の丸い水瓶の縁に目を向けた。

その縁の蔭に隠れるようにして、身を丸めて震えている一つの影があるではないか。

それを見て、チャシャはほっとしたのか、短く息を吐き出したのだが、

「チャーシャー!!」

と、怒鳴るようなアリスの声が頭上から聞こえて来たではないか。

チャシャが首を少し動かして見上げてみたところ、白地に赤いフリルの着いた日傘らしき物を広げたアリスが、ビルの屋上から飛び降りる姿が見えた。

現実でなら、そんなことをすれば惨事となるが、ここは非現実。

非現実に存在する傘には、『メアリー・ポピンズ』と云われる浮遊魔法が付与されていることが多く、アリスが手にしている傘も、その例外にある傘ではないら

しい。

傘を片手に物理法則を完全に無視し、ふわりふわりとゆるやかに落下し続けたアリスは、音もなく噴水の水瓶の縁に着地する。

「っの、馬鹿！」

云うなりアリスは傘を畳み、それを武器よろしくチャシャに突きつける。

チャシャは目深く被るフードの下から、それを見やった。

「一匹は残せて云っただろー!？」

ブンツと勢いよく日傘を振り回したところ、アリスはバランスを崩し、水瓶の縁から足を滑らせた。

「あ」

やっべ、と、呟いた時には、雑草の生えるアスファルトの上に尻餅をついて座り込み、イタタと尻をさすっている——はずだったのだが、その身は何時の間にやら、傍らに立つチャシャに支えられており、

「お怪我は？」

と、訊ねられれば、

「ないっ！」

大丈夫だと答え、アリスはチャシャから離れると、その場で仁王立ちをして見

せる。

「アリス」

「あんだよ？」

「その傘は、どうしたのですか」

自分が見たことのない傘だと、何処で手に入れたのかと云うことを、チャシャはアリスに問うた。

このタイミグでその質問かとアリスは思ったものの、長年共に居ても得体の知れないチャシャに、否、自分のこととなると、何でも把握していないと気が済まない相手に、そんなことどうでも良いだろうと口にすれば、どうなるかは火を見るより明らかなことなので、

「白と赤の双子女王姉妹から貰ったんだ。俺は肌が白いから、日焼けしないように使えってさ」

こう素直に答えると、

「そうですか。やはり暴力姉妹は腐つても女王と云うことですな。女王の名を持つ者に相応しくセンスだけは素晴らしい。とても良く似合っていますよ、アリス」

と、若干不満そうにアリスを褒めた。

因みに、チャシャが明らかに不満を覚えている原因は、自分からではなく他人から送られた物を、アリスが使っている所為である。

「なんかあの二人に対して、さりと暴言吐いてないか、お前」

「気のせいです」

「じゃあ、そう云うことにしといてやる」

話を元に戻そうと、アリス。

「で、だ」

一呼吸置き、

「人っ子一人残ってねえじゃねえか、この馬鹿！」

馬鹿莫迦バカばーか！と、アリスはチャシャに詰め寄る。

チャシャは、やはりそのことか、と思う。

それはそうだ。

アリスに云われた通りのことをしたはずがついついやりすぎてしまい、広場に居た人々を一人残さずバラしてしまった、と。

これではアリスに怒られてしまう、と、そう自分でも思っていたのだ。

噴水の水瓶の縁、その蔭に潜み丸まっている人影を見つけるまでは。

とは云え、チャシャがそのことに気付いても、アリスが居た場所からこの人影

に気付けるわけがなく、

「アリス、そのことです」

チャシヤは、噴水の水瓶の縁蔭を見て欲しいと云うように、そこを指さして見せた。

「あ？」

そこに何があるのかと、アリスが素直にチャシヤの指先を辿ったところ、噴水の水瓶の縁蔭に潜み丸まっている人影に漸く気付くことが出来た。

「一人は」

残っていたと、残しましたと、チャシヤ。

「偶然だろ」

絶対にと云いながら、アリスが人影に向かってしゃがみこんだところ、空気に溶けるようにしてチャシヤの姿が消えた。

そんなチャシヤに、アリスは視線すら向けることなく、

「おーい」

と、未だ震えている人影に声を掛けた。

人影は応えようとしなかったが、根気よく声を掛け続けたところ、漸く身を起こして、こちらに視線を向けた。



非現実の中に入る際、だいたいの者は己を良く見せようと、仮初めの姿に己の美意識を反映し、所謂『美』と云う言葉が冠に着く容姿をしている者が多いのだが、今アリスに視線を向けている者は、良くも悪くも『普通』で、それこそ『モブ』と称されるに相応しい当たり障りがなく目立たない二十歳前後の青年男子と云った容姿をしている。服装は、現実で身に着けていても決しておかしくはない、TシャツにGパン、足下は普通のスニーカーである。

ただ、アリスに向けられている目は普通ではなく、恐怖や畏れ、それと僅かな好奇心と警戒心が宿っているのが見てとれる。

アリスはこの青年を安心させる為、柔らかな笑みをその顔に浮かべると、

「大丈夫？」

と、出来るだけ優しい口調で訊ねたのだが、青年からの返答はなかった。

それでも、返事くらいしろだの何だのとは云わず、微笑を浮かべたまま青年からの返答を待っていたところ、

「……あ、あ。うん、大丈夫、です」

はい、と、青年は頷いた。

それからほんの少しの間を空けて、

「あの、キミは？ キミは大丈夫？」

と、訊いてきた。

これは、チャシャの起こした惨状を目の当たりにし、混乱していた頭や思考、感情、その他諸々が冷静さを取り戻し、自分以外にも助かった者が居たと見ての問いなのだろうか。つまり、つい先程まで繰り広げられていたアリスとチャシャの会話は、全く耳に入っていなかったとみて間違いない。

「俺は、大丈夫」

アリスは笑顔を決やさずに答えた。

少女の姿をした者の一人称が『俺』であるにも関わらず、  
「そう」

良かったと、一人称を気にする素振りも見せずに受け入れた青年が大きく安堵の息を吐き出したのは、現実と非現実の性別が必ずしも一致するとは限らないと解っているからだろう。

そう、折角非現実で過ごすのだからと、現実とは違う性を選択し、その性になりきって過ごしている者なんて、掃いて捨てる程いるし。わざと異性の姿を選び、中身は現実の性別のまま過ごしている者も、ゴマンという。

また、現実では同性愛なんてと差別発言をする者でも、相手の現実での性を知りながらも非現実であればと、現実と非現実で、非現実と現実では同性同士であ

っても関係ないと、恋人関係になる者も、呆れてしまう程に多い。

と、云うことはさておいて。

「さっきの、あのPKは？ それに……」

この異常なまでの静けさは一体と、青年は辺りを見回した後、ギョツとした様子を見せた。

それはそうだろう。

活気が溢れていた虚実入り交じるファンタジー都市であったポータル広場は、人がこの地から居なくなつて何百、何千と云った年月が経つたと云われても疑いようがない廃墟の森と化しているのだ。

ついでに云えば、自分と目の前に居る少女以外、誰も、人っ子一人居ないのだ。普段であれば。

そう、普段であれば、たとえモンスターが街を襲撃するイベントが起こり、あちらこちらに死体が転がるような有様になったとしても、こんなに、耳が痛くなる程の静けさに見舞われるようなことは、今まで一度もなかった。

それなのに、と。

「さっきのアレだけだな」

と、アリス。

流石に、自分がチャシャに命じて云々と云うことは口に出さず、

「アレはバグだったみたいだぜ」

『バグ』とは、童話や寓話の中に住まうイキモノをモチーフに造られたこの非現実世界を闊歩しているモンスターのことである。なので、バグの形状や名称は、誰もが一度は目にしたことがあるモノばかりである。

「バグ？」

あれが？ と、青年。

あのバグは、普段目にするモノとは違う形状をしていたような、と。

それだけではなく、名も伏せられていたような、と、青年が首を捻ったのは、NPCやバグは一目でそうと解るようにと、その頭上に名称が表示されているのだが、この広場を襲ったモノにはそうした表示が無かったと覚えているからだ。しかし、一方的な殺戮が始まって直ぐに、噴水の水瓶の縁蔭に隠れてしまったので、偶々それが確認出来ていなかっただけかのかも知れない、と。

「突発イベント用のバグ、だったのかな」

極稀に、何の告知もなく開催されるイベントがある。

それは、シークレットイベントとか、突発イベント等と呼ばれているのだが、一切告知がされずに唐突に始まるわけではない。

このテのイベントが開始される直前になると、必ず何らかのアナウンスがされ、その流れでイベントが開始されるのだ。

また、こうしたイベントでは、普段はお目にかかれないイベント専用の特別なバグが出現することが多い。

今回もまたそうしたバグが出現し、目の前に広がる風景はイベント用の特別演出であると云うのであれば、なんとか納得することが出来る。

まあ、それにしたって、とは思うが。

「あのバグはな、そのテの正規のバグじゃなかったらしい」

「え」

「誰かが改造して持ち込んだウイルス付きのバグだったんだとさ」

そのウイルスの所为で、ポータル広場はこのように書き換えられてしまっているのだ、と。

また、何らかのことが原因となりウイルスが他の地区に行ってしまうぬようにと、一時的にこのポータル広場は閉鎖されていると、アリスは最もらしいことを口にする。

ここで、青年はハツとした様子で改めてアリスを見やる。

アリスは、どうしてそのようなことを知っているのかと、

「キミは、もしかしてGMさん？」

要するに、運営側のニンゲンなのかと訊ねる。

「そ」

と、アリスが頷いたのは、そうではないことを目の前に居る青年に話したところで、今は無駄なことになると解っているし、それより何より、自分の存在と、この世界についての説明をするのは、とても面倒なことであるからだ。だからこそ、今は青年の思い込みに合わせるようにして、話を進めようと決めている。

「で、俺はアリスって云うんだが」

と、何気なくアリスが名乗ったところ、青年が云われてみればと云わんばかりに、アリスの全身を上から下まで見回した。

昨今、童話や寓話をモチーフにしたゲームは数多く創られており、この場——現実を仮想現実にかエる虚構MMORPG『黄金色の午後の庭・オンライン』も、例外ではない。

だからかどうかは解らないが、この非現実に集うPLが名乗っている偽名は童話や寓話の登場人物に因んだものが多い。しかし、そんなことを抜きにしても、自分の目の前に居る『アリス』は、イメージカラーが違うだけで、どう見ても。

「アンタは？」

と、アリスが青年の名を訊ねたところ、

「しろいうさぎって書いて、白兎<sup>はくとう</sup>」

青年は、こう名乗った。

「白兎、か」

青年が名乗った名を、小さく口の中で繰り返したアリスは、僅かに口元を歪めてから、

「んじゃあ、白兎。アンタ、ログアウト出来るか試してくれるか？」

「あ、うん」

白兎はもそもそと、ズボンのポケットからスマホを取り出すと、開きっぱなしのアプリ画面から「ログアウト」と書かれたキーを押す。

が、何も起こらない。

「あれ？」

何時もであれば、このキーを押すだけで否応なしに現実に戻されてしまうのに、

「あれ？ あれ？」

何度押しても、押しても、押しても、非現実から現実に戻される際に発生するエフェクトも出ないし、僅かに感じる浮遊感もない。

「なんで？」

と、思わず白兔は溢した。

だが、その口調に驚きや焦りと云った感情は感じ取れなかった。その代わりに感じ取ったのは、喜怒哀楽で云えば『喜』の感情。

アリスはそれに気付いたが、わざと気付かぬフリをし、

「んー、ログアウト出来ない、か。ま、アンタはバクが発生した場所の近くに居た、謂わば唯一のイキノコリだからな。そーすつとつてことで、ご足労掛けるが、このセカイを管理してる城まで行って、精密検査受けてもらっても良いか？」

何せと、アリス。

またもや尤もらしい言葉を並べ立てて口にしたところ、白兔はアリスの言葉を疑うことなく信じこんだらしく、こくりと頷いた。

「話が早くてありがたい。じゃ、これ」

アリスは何処からともなく、銀色の懐中時計を取り出して、白兔に差し出す。

「これは？」

「管理者パスみたいなものさ。それがあれば、管理側で閉鎖してる立ち入り禁止区域も、問題なく通れる」

「お借りします」



白兎はアリスから懷中時計を受け取ると、ズボンのポケットに仕舞いこむ。

「で、俺はこれから此処ら一帯の調査をしなきゃならなくてな。悪いんだけど、城までは一人で行って貰うことになるんだが、大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。あの、お氣をつけて」

「ありがとな。調査が終わったら、アンタの後追っかけるからさ」

「はい」

「じゃ、この地区の出口はあちら」

アリスは、パチンと指を鳴らした――のだが、不発に終わる。

これに、むうと片頬を膨らませると、

「ああ、もう！」

カッコくらいつけさせろよと悪態を吐き、

「『開け！ ウサギ穴』」

地面に向かってこう命じたところ、白兎の足下に小さな穴が開いた。

と、同時に、

「え、ええ!?」

絶対に落ちることのないサイズのその穴に、何の前触れもなく落下した白兎は、当然の如く悲鳴を上げながら、真っ暗な地下へ地下へと落ちてゆく。

その様子を、穴の入り口から覗いていたアリスは、

「あいつが本物のシロウサギだと助かるんだけどな」

こればかりは城に着くまで解らないしと、溜息交じりに立ち上がる。

「ま、先ずは一仕事完了ってことで、帽子屋のどこでも行くとすつか」

アリスは日傘を広げると、中棒を肩に掛けるようにしてさし、鼻歌交じりに歩き出す。

そうして、二、三步ほど行ったところで、アリスの姿は霧のように消えた。

【新約△アリス お試し版】

本編発行 2017/12/30 お試し版2018/01/末

サバ織り定食◇日向 <sup>ひゅうが</sup> <sup>ほうこう</sup> 豊光

本編の表紙とか色々担当◇枝豆@下町

連絡先 sabaoriteishoku@gmail.com

Twitter @Houkou\_Hyuuga

※本書は2007年05月04日に発行した【アリス】と、2008年08月24日に発行した【アリス・アリス】を加筆修正したものの一部です。

【禁】無断転送・加工・複製・複写・転売・オークションへの出品・ネット上へのアップロード行為は絶対にお止めください。